

執筆要項

1. 論文の長さは、文献・図表・abstractを含め8ページ(12000字)までとする。但し超過した場合その費用は執筆者負担とする。なお、短報については3ページ以内(4500字)とし、abstractは100語程度、図表や引用文献は精査して必要最小限に抑えて(図表は1~2つ程度)紙面を取りすぎないようにする。
2. 本誌論文の原稿執筆にあたっては、下記の事項を厳守されたい。
 - (1) 原稿は、ワードプロセッサ(A4判縦置き横書き、40字×30行、10枚、余白上下左右各3cm、フォント10.5ポイント)により作成し提出する。

原稿は、1枚目：題目・英文標題を記し副題をつける場合にはコロン(:)で続ける。英文タイトルの最初の単語は品詞の種類にかかわらず第1文字を大文字にする。その他は固有名詞など、特に必要な場合以外はすべて小文字とする。

2枚目：著者名とそのローマ字名、著者の所属名とその正式英語名及び所在地(英文字)、所属の異なる2人以上の場合著者名の右肩に*、**、…印を付して、脚注に*、**、…印ごとに所属名とその正式英語名及び所在地(英文字)。大学の所属が学部の場合は学部名を、大学院の場合は研究科名を明記する。官公庁や民間団体の場合は部課名まで記入する。

3枚目：英文要約(タイプ用紙ダブルスペース250字以内)。この要約には、原則として研究の目的、方法、結果、および結論などを簡明に記述する。

4枚目：和文要約(編集用；英文要約と同一内容)。

5枚目以降本文、注記、参考文献、図・表の順に書く。
 - (2) 外国人名・地名等の固有名詞には、原則として原語を用いること。固有名詞以外はなるべく訳語を用い、必要場合は初出のさいだけ原語を付すること。
 - (3) 数字は算用数字を用いること。
 - (4) 参考文献の引用は執筆要項補足による。
 - (5) 図・表は1枚の用紙に刷り上りと同様のサイズになるように1つだけ書く。また図と表のそれぞれに一連番号をつけ、図1、表3のようにする。(上記要項補足参照)
 - (6) 図や写真の原稿は明瞭に作成し、Wordファイルに貼り付ける。受理後印刷の段階で明瞭なJPGまたはPDFファイル等の提出を求めることがある。なお、刷り上りは白黒になるので明度を考慮すること。
 - (7) 図や表は本文に比べ大きな紙面を要する。(本誌1ページ大のものは1800文字の本文に当たる)から、その割合で本文に換算し全ページ数の中に算入すること。
 - (8) 参考文献の書き方は以下の原則による。

文献記述の形式は雑誌の場合には、著者名(発表年)、題目、雑誌名、巻号、論文所在頁；単行本の場合には、著者名(発表年)、書名、版数、発行所、発行地、参考箇所順とする。また記載は原則としてファースト・オーサーの姓(family name)のABC順とする。なお、上記要項補足参照。
 - (9) 本文が欧文の場合には上記要項に準じ、著者名と所属名は和文でも記入し、和文要約は掲載用となる。

執筆要項補足

1. 本文

- 1) 見出し：見出し語は適宜用いることができる。
- 2) 符号：次のような符号を用いることができる。
 - (1) ピリオド(.)およびコンマ(,)
 - (2) 中黒(・)相互に密接な関係にあつて、一帯となる文字や語句などを結ぶ際には中黒(・)を用いる。アルファベット文字を用いた用語には、中黒は使えない。

[例] 被験者 Y・K → Y.K.

- (3) ハイフン(-) 対語・対句の連結、合成語、ページの表記に用い、半角とする。
- (4) ダッシュ(—) 全角 1 文字分のダッシュ(一)は期間や区間を示すのに用いる。
波ダッシュ(~)は原則として用いない。
全角 2 文字分のダッシュ(——)は注釈的な説明をするのに用いる。
- (5) 引用符は、和文の場合には「」を、英文の場合には“ ”を用いる。
- (6) コロン(:) 副題、説明、引用文などを導く場合に用いる。
- (7) セミコロン(;) 複数の文献が連続する場合に用いる。
- (8) 省略符(…) 引用文の一部あるいは前後を省略する場合は、
和文の場合には 3 点リーダー(…),
英文の場合には 下付の 3 点リーダー(...)を用いる。

3) 数字：

- (1) 数を表示する場合は、原則としてアラビア数字を用いる。
- (2) 文字や記号の隅につける添え字はその位置に明瞭に表記する。
- 4) 単位：計量単位は、原則として、国際単位系(SI 単位系)とする。
- 5) 略語：論文中において高い頻度で使用される用語に対して、著者が便宜的に省略した語を用いる場合は、初出時に略さず明記し、(以下「……」と略す)と添え書きしてから、以後その略語を用いる。
- 6) 引用：論文中で文献を引用する場合には、基本的な文献を厳選し、正確に引用する。引用した文献はすべて文献表に掲載する。本文中の文献は原則として著者名と発行年で示す。ただし、この方式で表記することが著しく困難な場合はこの限りではない。
 - (1) 本文中で文献の一部を直接引用するときは、引用した語句または文章を、和文の場合には「」、英文の場合には“ ”でくくる。その後、()で著者の姓(family name)を記入する。

[例]

- ① 「パンとバラの時代のスポーツ」(長洲, 1998) という標語は…
- ② “interpretive cultural research”(Harris, 1998) の視点…
- (2) 著者が 2 名の場合、和文の場合には中黒(・)、英文の場合には“and”を用いてつなぐ。ただし、著者が 3 名以上の場合、筆頭著者の姓の後に、和文の場合には「ほか」、英文の場合には“et al.”を用いる。複数の文献が連続する場合はセミコロン(;)でつなぐ。

[例]

③「・・・・・・」(竹下・原宿, 1998)という結論は….

④“.....”(Park and Harris, 1998)という考え方には….

⑤「・・・・・・」(井頭ほか, 1998)という結論は….

⑥“.....”(Harris et al. , 1998)の視点は….

⑦身体活動の減少は心疾患危険因子を増加させるという報告(Paffenbarger et al. , 1978; Morris et al. , 1980)

(3)本文中で参照した文献を明記する場合には、次のような形で著者名と発行年を記入する。同一著者の文献が複数ある場合には、括弧内の発行年をコンマ(,)でつなぐ。

同一著者の同一年に発行された複数の論文は発行年の後に a, b, c, …をつけて区別する。

[例]

⑧岸ほか(1998)によれば….

⑨宇田川(1996, 1998)による一連の研究では….

⑩渋谷・竹下(1987)によれば….

⑪ Park and Harris (1998)および Butt (1987)の見解は….

⑫ Bloom et al. (1951)によれば….

⑬ Harris (1995, 1997a, 1997b)の一連のフィールドワークでは….

(4) 翻訳書の著者を表記するときは、カタカナ表記とする。

[例]

⑭マイネル(1975)は…。このマイネルの概念….

(5) 翻訳書と原著の両方を引用したときには、翻訳書は上記(4)に従って記入する。原著は英文表記とする。

[例]

⑮マカルーン(1970)によれば…。しかしながら、マカルーン(1970)のクーベルタン論では…、一方、MacAloon(1971, 1972, 1980)の一連の著作では…。

7) 注記：注は本文あるいは図表で説明するのが適切ではなく、しかも補足的に説明することが明らかに必要などきのみに用いる。その数は最小限にとどめる。注をつける場合は、本文のその箇所に注1)、注2)のように通し番号をつけ、本文と論文末の文献表との間に一括して番号順に記載する。注記の見出し語は「注」とする。

8) 特殊文字：

(1) ゴシック

ゴシックは見出し語のみに使用し、2重アンダーラインを用いて指定する。本文中の特定語句を強調するためのゴシック体の使用はさける。

(2) イタリック

次の場合にはアンダーラインを用いてイタリック体を指定することができる。

① 数式中の数

② 数値や量

③ 統計法に用いられる記号

④ 動物・植物の学名

本文中の欧語を強調するためにイタリック体を使用することは、引用の場合などを除いて避ける。

(3) アンダーライン

文意を強調するためのアンダーラインは使用しない。

2. 図表の作成

図表は執筆要項6, 7, 8に従って作成する。図表は、その大きさが刷り上りと同様になるように作成する。作成する場合のフォントの大きさは、和文の場合は明朝体 8 ポイント、英文の場合はセンチュリー体 9 ポイントを目安とする。

投稿時には、1 ページ当たり 1 点の図表をレイアウトするが、全ての図表を刷り上り紙面のサイズ(B5)に並べてレイアウト(図表にはそれぞれキャプションを入れたものの大きさとしてレイアウトする)したときに、合計で3 ページ以内とする。図表のファイルは、1 点 5 MB 以下とし最大10 個までとする。

図題、表題、それらの見出しや説明文、注は英文抄録の理解を助けるために、できるだけ英文とすることが望ましいが、同一論文で和文と英文の併用はさける。なお、表注は表の下に一つ一つ改行し、注符号は上つきダガーで†, ††, †††などの順に用い、アスタリスク(*, **, ***)は統計学上の有意水準を示すときにのみ用いるものとする。

3. 文献表の作成

文献表の見出し語は「文献」とする。文献の記載は原則として著者名のアルファベット順とし、書誌データには通常、著者名・発行年・題目(書名)・誌名・出版社・ページなどの情報が含まれる。書式は下記の例にならう。

1) 定期刊行物(いわゆる雑誌)の場合

定期刊行物の場合の書誌データの表記は、著者名(発行年)論文名・誌名、巻(号): ページ. の順とする。

(1) 著者名および発行年

共著の場合、和文の場合には中黒(・)、英文の場合には“and”で続ける。ただし、英文で3 人以上の場合にはコンマ(,)でつなぎ、最後の著者の前だけに“and”を入れる。発行年は著者名のすぐ後の()内に記入し、論文名と区切る。著者名の前に番号は不要である。同一著者、同発行年の複数の論文を引用した場合は年号の後に a, b, c, …をつける。

[例]

① 原宿健夫・岸 康夫・渋谷太郎(1990)

② Hall, M. A., Cullen, D., and Slack, T. (1989)

③ Ragenden, G. (1997a) Ultrasound Doppler estimate....

④ Ragenden, G. (1997b) Muscle blood flow at the onset....

(2) 論文名

論文名の最後はピリオド(.)を打つ。英文では、題目の最初の文字だけを大文字にする。

(3) 誌名

和文誌の場合は略記せず、必ず誌名全体を記載する。英文誌の場合は、その雑誌に指定された略記法、または広く慣用的に用いられている略記法に従う。それ以外は省略しない。誌名の最後はコンマ(,)をつける。

(4) 巻号およびページ

巻数の後にコロン(:)をつけ論文の開始ページと終了ページを省略しないでハイフン(-)で結び、最後にピリオド(.)を打つ。同一巻が通しページとなっていない場合には、号数を()で巻数の後に示す。

[例]

- ⑤ Sloniger, M.A., Cureton, K.J., Prior, B.M., and Evans, E.M. (1998) Anaerobic capacity and muscle activation during horizontal and uphill running. *J. Appl. Physiol.*, 83: 262-269.
- ⑥ Harris, J.C. (1989) Suited up and stripped down: Perspectives for sociocultural sport studies. *Sociol. Sport J.*, 6: 335-347.
- ⑦ Neumann, M. and Eason, D. (1990) Casino world: Bringing it all back home. *Cult. Stu.*, 4(1): 45-60.
- ⑧ 関 修(1990) ストレスを癒すフィジカル・エクササイズ. *イマーゴ*, 1(6): 172-181.
- ⑨ 立石憲彦(1990) 微小血管における赤血球からの酸素の放出速度の測定—装置の開発とラット腸間膜での測定—. *日本生理学雑誌*, 52: 23-35.

2) 単行本の場合

書き方の原則は定期刊行物の項に従う。

(1) 単行本全体の場合

著者名(発行年)書名(版数, ただし初版は省略). 発行所: 発行地, 引用ページ(p. または pp.)の形式とする。なお、引用箇所が限定できない場合には、ページは省略する。また、編集(監修)書の場合には、「編」、「監」、あるいは「編著」と表記する。英文では編集者が1人の場合は(Ed.), 複数の場合は(Eds.)をつける。

[例]

- ⑩ 保健体育科学研究会編(1981) 保健体育教程(新訂版). 技術書院: 東京, pp. 17-22.
- ⑪ Butt, D.S. (1987) *Psychology of sport: The behavior, motivation, personality, and performance of athletes* (2nd ed.). Van Nostrand Reinhold: New York, pp. 12-13.
- ⑫ 山口昌男編(1987) 越境スポーツ大コラム. TBS プリタニカ: 東京.
- ⑬ Chu, D., Segrave, J.O., and Becker, B.J. (Eds.) (1985) *Sport and higher education. Human Kinetics: Champaign.*

(2) 単行本の一部の場合

論文(章)著者, 論文(章)の題名の後に編集(監修)者名と「編」、「監修」、「編者」などをつける。英文の場合には、“In:”をつけたあと編集(監修)者名と(Ed.), または(Eds.)をつける。

[例]

- ⑭ Moony, J. (1983) The Cherokee ball play. In: Harris, J.C. and Park, R.J. (Eds.) *Play, games and sports in cultural contexts. Human Kinetics: Champaign*, pp. 259-282.
- ⑮ 新島龍美(1990) 日常性の快楽. 市川浩ほか編 *技術と遊び*. 岩波書店: 東京, pp. 355-426.

(3) 翻訳書の場合

原著者の姓をカタカナ表記し、その後ろにコロン(:)をつけて訳者の姓名を記入する。共訳の場合は中黒で、訳者が3人以上の場合は「:…ほか訳」と省略して筆頭訳者だけ記入する。英文の翻訳書の場合、

原著の書誌データは執筆者が必要と判断した場合に最後に< >内に付記する。

[例]

⑯ブルーム：菅野盾樹ほか訳(1988) アメリカン・マインドの終焉. みすず書房：東京, pp. 21-26. < Bloom, A. (1987) The closing of the American mind. Simon & Schuster: New York. >

3) インターネット・コンテンツの場合

書き方の原則は、定期刊行物の項に従う。

(1) オンラインジャーナルの場合

著者名(発行年)論文名. 誌名, 巻(号): ページ. <サイト名> (アクセス日)の順とする。

[例]

⑰野村照夫(2005) ノーティカルチャートとは何か. 水泳水中運動科学, 8(1): 1-6. < http://www.jstage.jst.go.jp/article/swex/8/1/1/_pdf/-char/ja/ > (2010.03.06)

(2) サイト内の文章の場合

発行年が不明の際は、n. d. (no date の略) を発行年に入れる。

[例]

⑱ Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences (n. d.) International Journal of Sport and Health Science (IJSHS) Submission Guidelines. < http://wwwsoc.nii.ac.jp/jspe3/journal/ijshs/guideline_e2.pdf > (2010.03.06)

4. 英文要約について

1) 英文要約については、編集委員会の責任において一応の吟味をする。英文に明らかな誤りがある場合には、原意を損なわない範囲で調整することがある。

2) 英文要約の作成にあたっては、特に次の点に留意する。

- (1) 日本国内で知られている固有名詞でも、海外の読者に知られていないようなものについては、簡単な説明を加える。
- (2) 段落の初めは5字分あけ、句読点としてのコンマおよびピリオドの後は1文字あける。
- (3) 省略記号としてのピリオドの後はあけない。

5. 謝辞, 付記など

公平な審査を期するために、謝辞および付記などは原稿「受理」後に書き加えることとし、投稿時の原稿には入れない。

6. 論文審査事項

論文の審査にあたり考慮することの中に、次の諸事項が含まれる。

1) 内容

原稿が未発表のものであること。ただし、

- (1) 学会大会等における口頭発表やその資料について、その内容を充実させたもの、あるいは各種研究助成金の交付を受けた研究を論文の形式にまとめたものは掲載の対象となる。

(2) すでに発表された論文に用いられた資料であっても、それについて異なった観点から分析や考察が加えられている場合には掲載の対象となる。

2) 人権擁護・動物愛護についての配慮

被験者や被験動物の取り扱いについては、「京都体育学研究における研究者の倫理について」を参照し、人権擁護・動物愛護の立場から十分注意するとともに、実際に配慮した点を論文中に明記する必要がある。

3) 用語やスタイル

(1) 文章表現について

- ①文章が簡明であり、すべての人が一義的に解釈できること。
- ②必要以上の省略がなされていないこと。
- ③一人称が乱用されていないこと。
- ④過大な修飾や客観性に欠ける修飾がなされていないこと。
- ⑤根拠に基づかない断定的な表現がなされていないこと。

(2) 題目(タイトル)が和英両文とも研究の内容を的確に表現していること。

(3) 略語や新語を用いるときには、初出時に説明がなされていること。

チェックリスト

「投稿規定」および「執筆要項」をよく読んだうえで、原稿を作成する。

以下はあくまでも形式的な事項についてのみの点検表である。

印 字

- A4 判横書き，全角40字30行のページ設定とした。
- 投稿規定の範囲内の文字数に収まっている。
- 本文・文献，図・表・資料・写真を揃え，通しページをつけた。
- 投稿ファイルでは，著者名や所属機関など投稿者の情報が削除してある。

記 述

- 英文抄録および英文抄録の和訳を作成した。
- 図表の番号は本文中に出現する順序通りである。
- 本文中の引用と文献表のあいだで，綴りや発行年が合致している。
- 本文中の注と注釈の番号が一致している。
- 原稿にすべての図や表の挿入箇所が示されている。
- 句読点は「，」「。」を使用した。
- 文献表は著者名のアルファベット順，ついで刊行年順に並べた。
- 謝辞や付記は記述していない。

再提出

- 再提出期限内の投稿である。
- 受付番号を投稿論文原稿の最初に記入した。
- 審査員ごとに「修正対応表」を作成した。